私たちのシェイクスピア

木下順二

ちくま少年図書館29

創造の広場

私たちのシェイクスピア

木下順二

ちくま少年図書館29
創造の広場

932／私たちのシェイクスピア

著者略歴

1914年東京に生まれる。東京大学英文学科卒業。主な著書に，戯曲では『オットーと呼ばれる日本人』『夕鶴』『神と人とのあいだ』，小説に『無限軌道』などがある。

筑摩書房／1975年初版
236pp／18.8cm／四六判

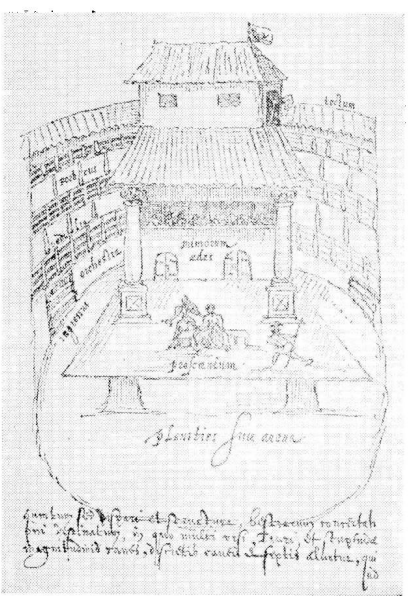
1975年10月25日　第1刷発行
1976年8月10日　第2刷発行

著　者 © 木下順二
発行者　井上達三
発行所　株式会社 筑摩書房（ちくましょぼう）
東京都千代田区神田小川町2－8
電話　東京（291）7651（代表）
郵便番号101-91／振替・東京6-4123

厚徳社印刷・和田製本

（分類）8098（製品）04029（出版社）4604

私たちのシェイクスピア



此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c

もくじ

はじめに

Ⅰまず作品を読もう——『ヴェニスの商人』——……9

Ⅱ劇場へ行ってみよう……129

Ⅲもう一度作品を読もう——『マクベス』——……163

Ⅳ最後に・せりふのおもしろさについて……207

はじめに

すぐれた芝居は、どんな人をも、それぞれにおもしろがらせてくれるはずのものだ。

どんな人を人をも、というのは、年よりでも若い人でも、女でも男でもだれでもを、ということである。る。

それぞれにれに、というのは、字も読めないようなおばあさんはそのおばあさんなりに、むずかしいことことばかり考えている哲学者はその哲学者なりに、おもしろがらせてもらえるはずだ、ということである。

いいかえると、私たちは私たちの持っている力（理解する力、感じとる力、味わう力、などなど）に応じて、その力のぶんだけその芝居をおもしろがることができるわけだ。

同時に、すぐれた戯曲を努力して読むことによって私たちは、今いったいろんな力を強

め、深め、ふくらませ、いっそう豊かなものにすることができるのだということを知っておく必要がある。

この本はそういう意味で、シェイクスピアをこれから読んでいこうとする若い人びとの役に立ちたいと思って書かれた。

最初の刊行は、同じ筑摩書房からだが一九五三年、もう二十数年も前のことになる。今度少しは手を加えようかと思ったが、最初の時に一気に書いた調子というものをそのままとっておきたかったので、戯曲の部分を新しく訳したのと、十数ページの書きたしをしたほかは、できるだけそのままにしておいた。

なおこの本を〝中等科〟だとして、ここを卒業したあとさらに〝高等科〟を望まれる読者には、私の次の本を読んでいただきたいと思う。

『随想　シェイクスピア』（筑摩書房、一九六九年、改訂版、七二年）

『シェイクスピアの世界』（岩波書店、一九七三年）

同時にこういうシェイクスピアについての本より、あるいは本だけでなく、作品そのも

のをどんどん読まれることをすすめたいが、翻訳は文庫本そのほか、いろいろと出版されているから、ここにはいちいち名をあげない。

なお、筑摩書房の原田奈翁雄、内田敦子、土器屋泰子のみなさんに大変お世話になった。感謝にたえない。考えてみると、原田君には、五三年初刊の時にもお世話になったのであった。長い御縁である。

一九七五年五月

木下順二

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c

I

まず作品を読もう

――『ヴェニスの商人』――

シェイクスピアという名前は、あなたがたのなかでもたいていの人が知っているだろうと思う。シェイクスピアはイギリスの劇作家である。それも三百五十年以上のむかしに死んだ人だ。日本でいえば徳川幕府がはじまったころ、歌舞伎劇がまだ生まれたばかりで、かんたんな歌にあわせてかんたんな踊りをおどっていたにすぎなかったそのころに、ロンドンではシェイクスピアのさまざまな問題をふくんだ『ハムレット』が、またあのはげしく美しいロマンスの世界をくりひろげる『ロミオーとジューリエット』が、そしてまたこれから私たちが読もうとしている『ヴェニスの商人』が上演されていたというわけだ。

勉強のための課題　シェイクスピアの生きていたころをイギリスでは何時代というか？　またヨーロッパ全体としては何時代というか？　そしてそれはどんな時代だったか？　を調べてみること。

勉強のための課題　そのころの日本はどんなようすだったか？　あなたがたでできるだけのことを調べて、ヨーロッパの状態とくらべてみたまえ。

さて、いろんな人がシェイクスピアの名前を口にし筆にする。日本でも彼の作品がたく

さん上演されているし、翻訳も多いし、彼についての研究書は、ことに外国においてはほとんど無数といってもいいほどであり、その数は今日でも毎年毎年ふえている。

なぜシェイクスピアはそんなにさわがれるのだろう？　そんなにさわがれるほど、なぜシェイクスピアはえらいのだろう？――これが、これからこの本の中で、あなたがたといっしょに考えてみたいことの一つである。

ところで、シェイクスピアがそのようにさわがれるわけを、ひとことでかんたんにいってしまえば、それはつまり彼の書いた芝居がずばぬけておもしろいからだ、ということになるのだが、しかし彼の芝居はほんとうにそんなにおもしろいのだろうか？　あれほどさわがれるところをみれば、おもしろいことは確かなのだろうが、しかしいちばん大切なことは、かんじんなことは、あなたがた自身がそれをおもしろいと感じるかどうかということである。いくら外国人や、またえらそうなおとながおもしろいといったって、あなたがた自身がそれをおもしろいと思わなければなんにもならない。このことをあなたがたはよく考えてほしいと思う。戯曲や小説や絵や音楽を味わう場合、人の意見や説明によってではなく、いつも自分自身で、よいとか悪いとかおもしろいとかつまらないとか、そういうふうにはっきりと知り、感じること、知り感じることのできるような人間に自分自身がな

ること、それがなによりも大事なことなのだ。そしてそれは、一人の人間としてこの世の中を生きていく上にも大切なことである。以下の私の説明も、すべてそのつもりで読んでいってほしい。読みながらときどき立ちどまって、私のいうことを、あなたがた自身ほんとうにそう思えるかどうか、自分をふりかえって考えてみてほしい。

そこで私は、いきなりあなたがたといっしょにシェイクスピアの戯曲『ヴェニスの商人』を読んでみたいと思う。まず作品そのものを読むことが、今いった意味から、なによりも大切だと思うからだ。作品について、あるいはその作品を書いた作家について、いろいろなことを知ることは、そのあとの仕事である。そのこともちろん大切であるには違いない。けれどもそれは、あくまでも作品そのものを正しく理解し、よく味わうために大切なのだ。もっとも、むかしの作品——古典——は、あとでも説明するように、いきなり読んでも現代のわれわれにはなかなかわかりにくい。だからまず自分の力でわかるだけわかろうとしながら作品を読み、そのあとで説明を読み、それからまた作品を読み返してみるというような努力が必要にもなってくる。この本では作品の間にそういう説明を少しずつ織り込みながら、しかしなによりも作品そのものを読むことが大切だという態度を忘れないで、私とあなたがたといっしょになって、シェイクスピアを味わっていこうというわ

けなのである。

そこでさっそく『ヴェニスの商人』を読みにかかるわけだが、その前に一つだけ、シェイクスピアの作品を読む場合にいちばん大切だと考えられることをいっておきたいと思う。

それは、シェイクスピアは三百何十年も前に死んだ人なのに、彼のいっていることが（つまり彼の戯曲の中に書かれてあることが）、ちっとも古くさくないということである。あなたがたは『ヴェニスの商人』を、三百何十年も前の古くさいお芝居だなどと思って読む必要はちっともない。それはもちろん、シェイクスピアはそういうむかしの人なのだから、汽船というものを知っていたわけがない。だからこの戯曲の中に出てくる商船はすべて帆をかけ、かいで漕ぐ船である。無線電信やラジオなどもむろんまだない時代であった。だから遠く貿易にでかけた船のようすは、その船が帰ってくるか、または途中でその船に出会ったほかの船が帰ってくるかするまでわからなかった。そういう意味でなら、つまり汽船やラジオが出てこないという意味でなら、この芝居は古い芝居だ。しかし大事なのはそんなことではない。ここに描かれている人びとが、その人びとの気持が、（風俗や外見の古さにもかかわらず）現代の私たちにぴったりくるということだ。現代の私たちにぴっ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c